

日本人 EFL 学習者の英語学習方略に関する研究(3) : 学習方略をめぐる他の要因について

北 條 礼 子*
(平成9年4月15日受理)

要 旨

学習方略は、他の要因と複雑に関連し合っているといわれている。そのうち本研究では、知覚的学習スタイル好性、動機づけ、性格特性について、将来的に日本人 EFL 学習者の学習方略とのかかわりを調査するため、この3種類の要因を測定する調査項目を選択することを目的としている。性格特性については、先行研究の結果を参考としたが、知覚的学習スタイル好性と動機づけについては1996年5月に本学1年生52名、50名をそれぞれ対象者として調査を実施し、因子分析により結果を分析した。その結果、知覚的学習スタイル好性について3因子6項目、動機づけについて4因子8項目を抽出した。性格特性については、4因子10項目を採用した。

KEY WORDS

知覚的学習スタイル好性	perceptual learning style preference		
動機づけ	motivation	性格特性	personality
学習方略	learning strategy	英語科教育	English education
語学教育	language education		

1. 研究の背景

1.1 知覚的学習スタイル好性について

Ehrman (1995) は、学習スタイル (learning style) を「新しい情報技術を吸収し、処理し、保持する個人の自然な、習慣的な、好みの方法(an individual's, natural habitual, and preferred way(s) of absorbing, processing, and retaining new information skills)」と定義した。本研究ではこの定義に従う。この学習スタイルとは、教授法や教科内容にかかわらず持続することも指摘されている (Kinsella, 1995)。

ところで、Brown (1994) によれば、学習スタイルは教育学者や心理学者により、さまざまな種類が指摘されてきている状態で、29もの学習スタイルを指摘した研究もあったということであるが、これまであげられた学習スタイルの中には、内容が重複しているものもある。

Ehrman(1995)は、学習スタイルを認知的学習スタイル、知覚的学習スタイル好性、情意的／気質的学習スタイルの3種類に大別した。この分類に従うと、最近のL2教育の分野で扱われているとBrownにより報告されている学習スタイルのうち、場独立型・場依存型、熟慮型・衝動型は認知学習スタイルに含まれ、視覚型・聴覚型は知覚的学習スタイル好性に含まれ、熟慮型・

* 言語系教育講座

衝動型、あいまい性への耐性、右脳型・左脳型は情意的／気質学習スタイルに含まれる。

Reid (1987) によると、上記にあげた視覚型・聴覚型による知覚の好みの型は、重要な要因であるにもかかわらず、L2教育の分野で研究の対象となることがほとんどなかった。Brown (1994) も、この種の学習スタイルは、通常の語学の授業では非常に重要であると述べている。また、Oxford (1994) も学習スタイルは学習方略の選択と関連し合っていると報告している。実際、日本の英語の授業でも、各種バラエティに富んだ教材が用いられている。たとえば、テレビの英語番組、ビデオ、LDなどの視聴覚教材、教科書、プリント教材、写真、挿絵などの視覚教材、オーディオ・テープやCD、ラジオの英語番組などの聴覚教材である。しかし、この他に、コミュニケーション能力を目的とし、各種ゲームやロール・プレイも実施されているのが現状であろう。

この各種ゲームなどの学習活動が言語学習に広く取り入れられていることも理由であろうが、知覚的学習スタイル好性として視覚型・聴覚型の他に体験型も一緒に扱われている。Kinsella (1995) によれば、この体験型は運動型、触感型に区別されることもあるが、その区別があいまいな場合もあるとのことである。本研究でも、2者を区別するのではなく、体験型として扱う。

ここで、この4タイプであるが、Reid (1995) は次のように捉え、その際、体験型についても述べた。

視覚型学習者 (visual learner) は目を通してより効果的に学習する (seeing)

聴覚型学習者 (auditory learner) は、耳を通してより効果的に学習する (hearing)

触感型学習者 (tactile learner) は、触れることを通してより効果的に学習する (hands-on)

運動型学習者 (kinesthetic learner) は、具体的に体を動かすことを通してより効果的に学習する (whole-body involvement)

体験型 (haptic learner) は、上記の触感型と運動型を組み合わせたものである。

研究者によっては、体験型のタイプを好む研究者もいる。つまり、3つのタイプから成る分類と、4つのタイプから成る分類があり、どちらを用いるかは研究者の判断に委ねられている。

学習方略と学習の知覚的学習スタイル好性について検討した実証的研究も、少数ではあるがみられる。Oxford, Park-Oh, Ito, & Sumrall (1993a) は、衛星方法を通して日本語を学習中のアメリカ人高校生107名の日本語到達度と知覚的学習スタイル好性を検討し、知覚的学習スタイル好性が学習方略とも関係があることを報告した。

Rossi-Le (1995) は、20歳から52歳までのアメリカへの移民成人147名を対象に、学習の好みの型と学習方略の関係を調査した。調査に用いられたのは、学習の好みの型を調査するためにReid (1987) が開発した、PLSP (the Perceptual Learning Style Preference) と、Oxfordが1986年に開発した80項目から成る学習方略を測定する調査票 (SILL) だった。PLSPには知覚的学習スタイル好性として、視覚型、聴覚型、運動型、触感型、個人学習型、グループ学習型の6種類の学習スタイルが組み込まれている。一方SILLの項目は、一般学習方略、本物の言語使用、意味のコミュニケーション、個人学習、記憶、社会的方略、情意的方略、自己管理方略、視覚化、言語モデル構築、の10種類の方略に下位分類されている。結果であるが、ほとんどの学習者は、体験型 (運動型+触感型) とグループ学習を好んでいたことと、知覚的学習スタイル好性と学習方略の間には特定の関係がみられたが、たとえば、体験型の学習者は実際に英語を使用できるよう英語のネイティブ・スピーカーを探してみる、本物の言語使用という方略

を用い、視覚型の学習者は心的イメージで新しい単語をおぼえる方略を用いていたことが報告されている。

以上の研究結果から、学習スタイルの知覚的学習スタイル好性は、学習方略と関連があることがわかったが、日本人 EFL 学習者における学習方略と知覚的学習スタイル好性を検討した研究は数が少ない。

1.2 動機づけについて

Brown (1994) は、動機づけを「人のある特定の行動に駆り立てる内的な原動力、衝動、勘定、欲求 (an inner drive, impulse, emotion, or desire that moves one to a particular action)」として定義づけている。

Scarcella (1992) の説明するところでは、言語学習における動機づけの役割は社会心理学的に扱われることが多いが、このアプローチには、学習中の言語が用いられている社会、つまり目標文化に属する個人に対する関心が含まれる。Gardner 他は長年、統合的動機づけ (integrative motivation) と道具的動機づけ (instrumental motivation) を提唱してきた。統合的動機づけとは、目標文化に自分自身を統合するため言語を学習したという願望であり、道具的動機づけとは、よりより職業についたり言語の資格を取得するため言語を学習したいという願望である。Scarcella は、統合的動機づけを強調する彼らの主張に対し、この2種類以外にも状況によって異なる種類の動機づけも存在するのではないか、と反論を加えている。たとえば、楽しみのために言語学習を行なう、目標言語の社会に溶け込むためではなく、単にネイティブスピーカーと話すために言語を学習する、などの動機が考えられるが、彼らは他にも動機はあるのだが、まだ研究されていない、と述べている。さらに Gardner 自身が、統合的動機づけを強調する必要がないとその主張を変えてきたことにも言及した。

また、MacIntyre (1994) は言語学習方略使用において、社会心理学的変数が中心的役割を果たしているとして、社会心理学的モデルを提案した。このモデルでは統合的動機づけが土台となっている。この構成概念はさらに相互関係がある3要素から成っている。つまり、学習状況に対する態度、統合性、動機づけである。まず、学習状況に対する態度とは語学の授業と教師に対する評価であり、この両者に対する学習者の抱く肯定的態度の程度と定義される。次に統合性とは学習中の言語話者に会ってコミュニケーションをしたいという願望であり、学習中の言語話者への肯定的態度、外国語に対する一般的な関心、学習中の言語話者に会うことは言語学習の良い理由であるという観点として定義づけられる。

さて、学習方略と動機づけについての実証研究であるが、Oxford & Nyikos (1989) は大学生1200名を対象として、学習方略の選択に影響を及ぼす要因について大規模な研究を行った結果、動機づけが方略使用の最大の予測因子であることが明らかになった。また Oxford & Crookall (1989) においても言語学習に対する動機が方略使用の中心となる役割を果たしていることが報告されている。Bacon & Finneman (1990) は、大学生938名を対象として、109項目から成るリッカート式のアンケートを用いて、学習方略、動機づけ、オーセンティックな教材との関係を、因子分析、回帰分析により調べた。その結果、1) 学習方略の選択において動機づけの役割が大きい、つまり、統合的動機づけの強い学習者はオーセンティックな教材に対して分析的方略を避ける傾向があること、2) 女性は統合的方略、男性は分析的方略を用いる傾向があることこの2点が明らかになった。Oxford 他 (1993) は高校生107名を対象として、衛星放送によ

る日本語教育において日本語の到達度に影響を与える要因について、アンケートを用い、因子分析、回帰分析、分散分析によりデータを解析したが、動機づけが日本語力到達度の最大の子測因子であることがわかった。また、日本人大学生を対象とした LoCastro(1994)の研究では、対象者数も少なく、統計的処理も行われていないが、動機づけについていくつかの報告が行われている。つまり、対象者にとって、語学学習において試験の準備が最大の動機づけであり、その際の主な方略は暗記であること、それ以外に学習している語学が好きであるという動機もあったこと、また、大学入学後、語学学習に対する動機が変化していたという内容である。

以上の諸研究に共通しているのは、たとえば動機づけが学習方略選択の強い子測因子であるというように、学習方略と動機づけはかなり深く関連し合っていることである。

1.3 性格特性について

Ellis (1986)によると、「良き言語学習者 (good language learner)」の特徴は以下の9点にまとめている。

- ①外向的で社会的スキルを身につけている。
- ②学習対象言語を用いる機会を逃さない。
- ③学習対象言語で対応する機会を最大限に利用する。
- ④学習方略を身につけている。
- ⑤子供より、青年・成人に多い。
- ⑥言語材料を学習する分析的スキルを身につけている。
- ⑦強力な動機づけがある。
- ⑧チャレンジ精神が旺盛である。
- ⑨さまざまな学習状況に柔軟に対応できる。

Ellis (1986)は、さらに性格関連の研究について、その同定と測定が困難であることを指摘した。また、Ellis (1994)は、性格特性に関する先行研究を概観し、次の4つの問題点を指摘した。その4点とは、①性格の変数は非常に混同している、②性格変数は、定義が確立されていない状態にあり、曖昧で重複している、③性格変数を測定するのに用いられている測定法が多様であり、妥当性、信頼性に欠けるものもみられる、④様々な研究結果に一貫性がみられない、というものであった。

Tsuchihira (1993)は、以上のEllisの概念を基に、日本人の良き言語学習者の特性として以下の7点を仮定した。

- ①動機づけ
- ②外向性
- ③権威主義
- ④協調性
- ⑤自尊心
- ⑥冒険心
- ⑦社会的スキル

Tsuchihiraは、以上の性格特性と到達度の関係を調べたが、その結果、到達度と外向性、社会性、権威主義との間に弱い正の相関関係がみられ、自尊心との間に負の相関関係がみられた。

Ohmura (1996)は、日本人学習者の性格特性と英語の到達度の関係について検討したが、上

記の Tsuchihira の仮説を参考に、性格特性として、①の動機づけを除いた6つを扱った。言語学習に関係しているといわれる性格特性を測定するため、Ohmura が予測調査を経て選定し、研究の結果、日本人学習者の英語到達度と冒険心、自尊心、外向性、権威に対する態度が関連があることが明らかになった。

Ehrman & Oxford (1990) は、大卒の成人20名を対象とし、8種類の心理学的性格特性と学習方略との関連を検討した。用いた測定具は心理学性格テスト (MBTI) と学習方略 (SILL) であり、面接も実施した。その結果、この研究の対象者に限っているが、内向的、直感的、感受的、感覚的な人は語学学習に向く傾向がみられた。また彼らは、性格のタイプは学習方略の使い方に深く関わっているため、性格のタイプを知ることは学習者の自己規制のための学習方略認識のために有効であろうと述べた。

以上から、性格特性と学習方略との間に何らかの関係があることはいえそうである、この要因に関しても日本人EFL学習者を対象とした研究はほとんど見受けられないのが現状である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、学習者の英語学習者における、知覚的学習スタイル好性と動機づけを測定する項目をそれぞれ選定し、さらに性格特性の測定項目についても選定結果を述べることである。

3. 調査 1

3.1 方法:

①対象者：大学1年生52名

②材料：Reid (1995) の資料を基に、著者が対象者が日本人であることを考慮して選定したのが以下の12項目である。

1. テレビ番組やビデオの教材を用いて勉強することが好きだ
2. マンガやさし絵、写真のついた教材を用いて勉強することが好きだ
3. 市販のテープやCDの英語学習教材や洋楽を聞きながら勉強することが好きだ
4. LLで外人の自然な英語を聞きながら勉強するのが好きだ
5. グループで対話練習や寸劇の練習をするのが好きだ
6. グループでゲームをしながら勉強することが好きだ
7. 何かをおぼえるとき、書きながらおぼえるとおぼえやすい
8. 地図やグラフを見ながら勉強するのが好きだ
9. 何かをするとき、その指示を自分で読むより誰かに読んでもらうほうがいい
10. 教科書を読むより、先生の説明やテープを聞くほうがいい
11. 何かをするとき、その指示を読んだり聞いたりするより、まずしてみるほ

うが好きだ

12. 机に向かってじっとしているより、動き回れるときのほうがよく考えられる

③実施時期：1996年5月

④実施方法：通常の授業時に約5分間で実施した。1～5の5段階尺度形式

⑤分析方法：因子分析

3.2 結果：

①平均値，標準偏差

以上の12項目の平均値，標準偏差は以下の表1のとおりである。表1をみると，項目7が平均値±標準偏差の値が得点範囲（1－5）を越えて天井効果を示したので除外した。その他の項目は因子分析に持ち込んだ。

表1：12項目の平均値，標準偏差

項目	平均値	標準偏差
1	4.17	0.92
2	3.87	0.93
3	3.94	0.98
4	3.60	1.01
5	2.62	1.05
6	3.63	1.14
7	4.08	1.04
8	2.94	1.02
9	2.62	1.01
10	3.48	0.96
11	3.32	0.96
12	3.19	1.40

②因子分析

英語学習の知覚的学習スタイル好性に関する12項目の得点について，共通性の初期値を1とした反復因子法を実行し，後続因子との固有値の差に基づいて3因子解を適当と判断した。その結果として，再度3因子解を仮定した反復主因子法を実行した。バリマクス回転後，各項目の因子負荷量を得た。次に3因子の解釈に辺り，回転後の因子パターンにおいて絶対値.40以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。バリマクス回転後の因子パターンは表2に示すとおりである。因子の解釈にあたり，基本方針として，表27の回転後の因子パターンにおいて絶対値.40以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。

表2をみると，第I因子には項目5，6，11，12の計4項目が，第II因子には項目2，8，

表2：バリマクス回転後の因子負荷量

	因子 I	因子 II	因子 III	共通性
項目 5	0.8333	-0.0193	0.1616	0.7208
項目 6	0.7914	-0.0222	0.0514	0.6294
項目11	0.6801	0.3599	-0.2846	0.6730
項目12	0.6412	0.3951	0.1527	0.5906
項目 2	-0.0082	0.7449	0.2136	0.6006
項目 8	-0.0576	0.6952	-0.0054	0.4866
項目10	0.2847	0.6833	-0.1556	0.5721
項目 4	0.2780	0.6810	0.1276	0.5574
項目 3	0.4983	0.5197	0.2967	0.6064
項目 1	0.1541	0.2138	0.7139	0.5791
項目 9	-0.0016	0.0371	-0.7258	0.5281
説明分散	2.6280	2.5725	1.3437	6.5441

(注) 枠囲いされた数値および下線を引いた数値は |0.40| 以上。

10, 4, 3 の計 5 項目が、第 III 因子には項目 1, 9 の計 2 項目が含まれていた。ただし、項目 3 は両義性を示したので、解釈からはずした。各因子に含まれた項目内容から、第 I 因子を「体験型」、第 II 因子を「視聴覚型」、第 III 因子を「視覚型」と命名した。

因子分析の結果に基づき、各因子内容を代表すると考えられる項目を中心とし、さらに負の因子負荷量を示した項目は表現を変更することとし、英語学習の際の知覚の好みを測定する項目として、最終的に次に示すような、「体験型」2 項目、「視聴覚型」2 項目、「視覚型」2 項目の計 6 項目を準備した。

1. テレビ番組やビデオの教材を用いて勉強することが好きだ
2. LL で外人の自然な英語を聞きながら勉強するのが好きだ
3. グループで対話練習や寸劇の練習をするのが好きだ
4. 何かをするとき、誰かに読んでもらうより、その指示を自分で読むほうがいい
5. 教科書を読むより、先生の説明やテープを聞くほうがいい
6. 何かをするとき、その指示を読んだり聞いたりするより、まずしてみるほうが好きだ

4. 調 査 2

4.1 方法：

①対象者：大学 1 年生 50 名

②材料：Ogino (1995) の研究資料を基に、著者が対象者が日本人であることを考慮して作

成した数項目を付け加えた、以下の10項目

1. 英語の勉強は、英語を話す人々の文化や生活様式をよりよく理解するのを助けてくれる
2. 英語ができれば英語を話す人々と、より簡単に友人になることができる
3. より多くの様々な人と出会い、話ができるようになる
4. 将来、良い職業に就くために必要である
5. 社会的に認められるには、少なくとも1つの外国語を使えることが必要である
6. 学校で英語の授業があることや、進学するための入試科目なので必要である
7. 英語の試験でいい点数をとって、よい成績をとる
8. 英語で良い成績を取ると、親がほめてくれる
9. 英語で成績が良いと、誇らしい気分になる
10. 英語で成績が良いと、教師や友人からの評価が高まる

③実施時期：1996年5月

④実施方法：通常の授業時に約5分間で実施した。1～5の5段階尺度形式

⑤分析方法：因子分析

4.2 結果：

①平均値、標準偏差

以上の10項目の平均値、標準偏差は以下の表3のとおりである。表3をみると、項目3が平均値±標準偏差の値が得点範囲（1－5）を越えて天井効果を示していたが、内容が重要であると判断したので、すべての項目を用いて因子分析を行うことにした。

表3：動機づけ10項目の平均値、標準偏差

項目	平均値	標準偏差
1	3.76	0.98
2	3.94	0.98
3	4.08	0.94
4	3.82	0.91
5	3.62	1.10
6	3.88	1.08
7	3.42	1.07
8	2.48	1.22
9	2.98	0.98
10	2.82	1.16

②因子分析

以上の英語学習に対する動機づけ10項目の得点について、共通性の初期値を1とした反復主

因子法を実行し、後続因子との固有値の差に基づいて4因子解を適当と判断した。その結果として、再度4因子解を仮定した反復主因子法を実行した。バリマクス回転後、各項目の因子負荷量を得た。次に4因子の解釈に切り、回転後の因子パターンにおいて絶対値.40以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。バリマクス回転後の因子パターンは表4に示すとおりである。因子の解釈にあたり、基本方針として、表4の回転後の因子パターンにおいて絶対値.40以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。

因子分析の結果より、英語学習に関する動機づけを測定する項目として最終的に以下に示すような、「統合的動機づけ」2項目、「道具的動機づけ」2項目、「プライドの充足」2項目、「成績向上意識」2項目の計8項目を選択した。

1. 英語ができれば英語を話す人々と、より簡単に友人になることができる
2. より多くの様々な人と出会い、話ができるようになる
3. 将来、良い職業に就くために必要である
4. 社会的に認められるには、少なくとも1つの外国語を使えることが必要である
5. 学校で英語の授業があることや、進学するための入試科目なので必要である
6. 英語の試験でいい点数をとって、よい成績をとる
7. 英語で良い成績を取ると、親がほめてくれる
8. 英語で成績が良いと、教師や友人からの評価が高まる

表4：バリマクス回転後の因子負荷量

	因子I	因子II	因子III	因子IV	共通性
項目8	0.8273	0.1174	0.2171	-0.0677	0.7499
項目10	0.7824	0.2394	0.2609	0.3273	0.8447
項目9	0.7797	-0.0919	-0.3125	-0.0405	0.7157
項目3	0.0873	0.9317	-0.0035	-0.0698	0.8806
項目2	-0.0811	0.8131	0.2209	-0.2525	0.7803
項目1	0.4616	0.6562	-0.0634	0.1507	0.6704
項目4	-0.0332	0.0505	0.8667	-0.0985	0.7645
項目5	0.1451	0.0831	0.8011	0.2688	0.7419
項目7	0.0634	-0.0268	-0.1149	0.9264	0.8762
項目6	0.0035	-0.2024	0.3585	0.7531	0.7366

説明分散 2.1580 2.0905 1.8003 1.7120 7.7607

(注) 枠囲いされた数値および下線を引いた数値は |0.40| 以上。

5. 性格特性に関する項目の選定

言語学習に関係しているといわれる性格特性を測定するため、Ohmura (1996) が予備調査を経て選定し、研究の結果、日本人学習者の英語到達度と特に関係の深いことが明らかになった4種類の性格特性に注目し、因子負荷量の多い順に、項目を選択した。項目1、項目6、項目7が冒険心、項目2、項目3、項目9が自尊心、項目4、項目10が権威に対する態度、項目5、項目8が外向性を測定する項目である。なお、以上の項目の使用にあたっては、予め Ohmura の許可を得た。

1. 私は解けないような問題ほど解いてみたくなる (冒険心)
2. 知らない人に道などを遠慮なくたずねることができる (自尊心)
3. 自分には長所がたくさんあると思う (自尊心)
4. グループ活動はリーダーが重要だと思う (権威に対する態度)
5. パーティでは、冗談を言ったり、話したりするのは他の人にまかせて、自分では黙っているほうだ (外向性)
6. 私は自分が得意になれることなら何でも知っておきたい (冒険心)
7. 私は難しいと思うことほど、やってみたくなる (冒険心)
8. 人前ではきまりが悪くて思うように自分を出せない (外向性)
9. 人に勝(まさ)ると思う科目やスポーツがある (自尊心)
10. 年長者や目上の人は苦手だ (権威に対する態度)

6. 研究の考察

以上、英語学習の好みの型について3因子6項目、動機づけについて4因子8項目、性格特性について4要因10項目を採用し、本調査に備えることになった。各要因については以下のことがいえよう。

5.1 知覚的学習スタイル好性について

英語学習における知覚的学習スタイル好性を検討した結果、視覚型と聴覚型が重複する傾向があることがわかったが、このことは Brown (1994) が、語学学習の成功者は視覚的入力、聴覚的入力のどちらも有効に利用していると指摘しているが、彼の指摘を支持する結果であった。実際、英語の教材をみても、学習者がテレビの英語番組、ビデオ、LD など視聴覚教材に触れる機会が多いことから当然の結果であると推察される。

5.2 動機づけについて

動機づけについては統合的動機づけ、道具的動機づけの他にも、プライドの充足、成績向上意識という動機づけの下位分類が見出した結果となった。Scarcella (1992) の述べるように、動機づけには、統合的動機づけ、道具的動機づけの他にも異なる種類の動機づけが存在するの

ではないかという仮定を裏付ける証拠となると考えられる。

本研究で抽出されら、成績向上意識は、語学学習において試験の準備が最大の動機づけであるという、LoCastro (1994) の指摘を支持するものであった。

5.3 性格特性について

Ellis (1986) が述べたように性格特性は、その同定と測定が困難であり、さらに先行研究を概観した結果として、Ellis (1994) は、問題点を4つあげた。その4点とは、①性格の変数は非常に混同している、②性格変数は、定義が確立されていない状態にあり、曖昧で重複している、③性格変数を測定するのに用いられる測定法が多様であり、妥当性、信頼性に欠けるものもみられる、④様々な研究結果に一貫性がみられない、というものであった。国内のL2教育分野における性格特性に関する研究でも同様であろう。その中で、Ohmura (1996) の研究は、日本人EFL学習者を対象とした研究結果を参考とし、さらに学年も中学生から短大生までを扱った。性格特性を測定する項目も、心理学の分野で発表されているものを基に、予備調査を経て項目を最終的に選択している。この手順から判断して、Ohmuraの用いた調査項目が、確定的なものとはいえないまでも、かなり信頼がおけるものであろうと考えられた。

参考文献

- Bacon, S. M., & Finneman, M. D. 1990. A Study of the Attitude, Motives, and Strategies of University Foreign Language Students and Their Disposition of Authentic Oral and Written Input. *Modern Language Journal*, 74, 4, 459-473.
- Biehler, R. F., & Snowman, J. 1990. *Psychology Applied to Teaching* (Sixth Ed.) Houghton Mifflin Company.
- Brown, D. B. 1994. *Principles of Language Learning and Teaching* (Third Ed.) Prentice Hall.
- Ellis, R. 1986. *Understanding of Second Language Acquisition*. Oxford University Press.
- . 1994. *The Study of Second Language Acquisition*. Oxford University Press.
- Ehrman, M., & Oxford, R. 1990. Adult Language Learning Styles and Strategies in an Intensive Training Setting. *Modern Language Journal*, 74, 3, 311-327.
- 北條 礼子. 1996. 「日本人EFL学習者の英語学習方略に関する研究(1)」上越教育大学研究紀要 16, 1, 185-196.
- 北條 礼子. 1997. 「日本人EFL学習者の英語学習方略に関する研究(2)」上越教育大学研究紀要 16, 2, 583-596.
- Kinsella, K. 1995. Understanding and Empowering Diverse Learners in the ESL Classroom. In Reid, J. M. (Ed.) *Learning Styles in the ESL/EFL Classroom* (170-194). Heinle & Heinle.
- MacIntyre, P. D. 1994. Toward a Social Psychological Model of Strategy Use. *Foreign Language Annals*, 27, 2, 185-195.
- Ogino, K. 1994. *A Study of Learner Characteristics of Japanese EFL Junior High School Students: Learning Style, Strategies, Motivation and Gender*. Unpublished MA thesis. Joetsu University of Education.

- Ohmura, K. 1996. *A Study of the Correlations between Aptitude, Motivation, and Personality with Measured Achievement among Different Grade Levels of Japanese EFL Learners*. Unpublished MA thesis. Joetsu University of Education.
- Oxford, R., & Crookall, D. 1989. Research on Language Learning Strategies: Methods, Findings, and Instructional Issues. *Modern Language Journal*, 73, 4, 404-419.
- , & Nyikos, M. 1989. Variables Affecting Choice of Language Learning Strategies by University Students. *Modern Language Journal*, 73, 3, 291-300.
- , Park-Oh, Y., Ito, S., & Sumrall, M. 1993. Japanese by Satellite: Effects of Motivation, Language Learning Styles and Strategies, Gender, Course Level, and Previous Language Learning Experience on Japanese Language Achievement. *Foreign Language Annals*, 26, 3, 359-371.
- . 1994. La Difference Continue...: Gender Differences in Second/Foreign Language Learning Styles and Strategies. In Sunderland, J. (Ed.) *Exploring Gender* (140-147). Prentice Hall.
- Reid, J. M. 1987. The Learning Style Preferences of ESL Students. *TESOL Quarterly*, 21, 1, 115-126.
- . (ed.) 1995. *Learning Styles in the ESL/EFL Classroom*. Heinle & Heinle.
- Scarcella, R. C., & Oxford, R. L. 1992. *The Tapestry of Language Learning: the Individual in the Communicative Classroom*. Heinle & Heinle.
- Slavin, R. E. 1994. *Educational Psychology: Theory and Practice* (Fourth Ed.). Allyn and Bacon.
- Tsuchihira, T. 1993. Motivation and Personalities in Introducing Communicative English Teaching in the Japanese Context. *Tsukuba Eigo Kyoiku*, 14, 233-250.

A Study of Learning Strategies Used by Japanese EFL Students (3)

Reiko HOJO

In the field of the second language acquisition, learning strategies have been reported to be closely related with other factors, such as learning style, motivation, personality and so on. However, little research has been done on the relationship between learning strategies used by Japanese EFL students and these factors. In order to investigate the relationship, the development of questionnaire items for these factors was crucial.

The purpose of this study was to develop or prepare questionnaire items which were suitable for investigating learning styles, particularly, perceptual ones, and motivation of Japanese EFL students.

Firstly, data on perceptual learning style were gathered from fifty-two university freshmen in May of 1996, using a trial questionnaire consisting of twelve items. The data were analyzed by factor analysis, extracting three factors, each of which was comprised of two items respectively.

Secondly, data on motivation were collected from fifty university freshmen in May of 1996, using another trial questionnaire, consisting of ten items. The factor analysis was administered to the data. The result of the analysis found four factors, each of which included two items respectively.

Lastly, concerning personality items, they were chosen based on the results of previous study, in which the items suitable for Japanese EFL students at the level of junior highschool through junior college were selected through pilot studies. Four factors (ten items) were chosen as personality factors.